再び北野天使の故郷へ

相模原市　清水　弘

一九八〇年発行の「植物と自然」という科学雑誌に、当時の青森県におけるノハナショウブの自生地が詳しく紹介されている。今回の旅はそれらの自生地が現在どのような状態にあるのかを検証し、さらに北野天使級のピンク花を発見するという目的を持って、平成十八年七月二日より三泊五日の調査旅行に出かけた。同行者は玉川大学の田淵助教授で、既に本会の会報にも投稿されている生理・生態学に詳しい行動派の学者である。

1日目：青森駅前でレンターカーを調達した後、先ずは青森湾沿いを北上した。出発後、直ぐに水田風景が見られ、まもなく道路沿いにあるコンビニ裏の畦道で枝咲きとなったノハナショウブの一株を発見した。近くに栽培種の植栽がないので、浸透交雑の可能性のない野生種と確認した。これは幸先が良いものだと早合点したが、しばらく進んで行く内に以前に記録された場所は農地整備が進みノハナショウブの姿が何処にも見つからない有様に愕然とした。ノハナショウブの生育は一定の地下水位があることが決定的な要因の一つではないだろうか。近代的な用水路を作ってしまうとその環境条件の変化で短期間に絶滅してしまうように思われる。それでも何とか残存しているものを観察したいと極力、旧道沿いに車を走らせ、旧蓬田村湿地帯であった道路沿いにある工事現場の空き地でやっと十数株を見つけた。その中の一株はノハナショウブには非常に珍しいまん丸の丸弁個体で、米国品種ザ・グレート・モガールのノハナショウブ版といったところであった。続けて蟹田町へと入ったところで、ふと民家の庭先に白花ノハナショウブが群生しているのが眼に留まった。車を止めて近寄よって確認したところ、栽培種の血がほとんど入っていない白花であった。ひょっとしたら、植物雑誌に記載された蟹田山湿地から採取してきたものではないかと思い、その点を確認しようとその民家に早速、声をかけたが返事がない。どうしてもとの思いから家の裏手や脇などを回ってみたが、人のいる気配がないので諦めかけたところ、玄関脇の小窓から老婦人の顔が見えた。緊張した顔をしているので用件を端的に申し上げたところ、どこから入手したかは若夫婦がいないのでわからないとのこと、それでも撮影許可を頂いたので手早く撮影した。お礼にと車にあった茶菓子を差し上げたところ、フリーズした顔がみるみる笑顔に変わった。了解を得て株を分譲してもらったが、考えてみると留守役の老婦人にとっては恐怖のできごとであったことだろう。ずけずけ敷地内に乗り込んで来ていろいろ注文する野からであるから、「はい」といったら早く帰ってくれるからと思わせてしまったかもしれない。人間とは本人が夢中になってやったことが、相手に悪いことをしたと後になって後悔する動物である。この分譲株は「蟹田白」と命名し増殖中である。

次いで半島を横切るように進行方向を青森西部の十三湖に向けたが、多少の湿地はあるものの内陸部には自生が全くなかった。やがて十三湖へと出たが、その南方にあたる車力村の草原や湿地には、昔、ノハナショウブの自生があることが記録されている場所である。しかし、この辺りも水利工事がされていて、栽培種は見られるもののノハナショウブは観察できなかった。続いて地図にあるいくつかの池沼を目指し、平田沼へと辿り着いた。やっと沼畔に群生と呼べるくらいのノハナショウブを発見出来たが、この辺りは冷涼な気候らしくまだ二・三分咲きの状態であった。ゆっくり観察したかったが降雨がひどくなったので、一先ず宿の確保をしようと更に南下し、亀ヶ岡式遮光土器で有名な木造町の旅館に入った。濡れた衣服を着替えコンビニ弁当での夕食後、雨が止んだので散歩がてら近くにある有名なベンセ湿原に出かけた。ここは比較的温暖な場所らしくノハナショウブの最盛期は過ぎていたが、それでもある程度の花が見られた。木道となっている遊歩道沿いに淡色花が見られ、湿原中央部には白花も散見された。しかし、この湿原の傍らにブルトーザが入り込んでいる風景を見て、この湿原の水位が変化し近い将来起こってくる湿原植物の絶滅は明らかであった。

2日目：この日の目標は岩木山麓に自生する内陸性ノハナショウブの観察である。岩木山北麓の鯵ヶ沢町芦萢という山間部の小規模棚田にそれを発見した。写真撮影後、水田傍にあったお屋敷に情報入手に出かけたが、年配のご夫人が相手をしてくれた。先祖は京都の山城から来たので山城屋という屋号で、冬季の積雪は軒下まであるそうだ。この方は植物好きでシラネアオイやサルメンエビネ等々の山草を見せてくれた。こちらの事情も話して入る内に、水田のノハナショウブの採取許可を頂いた。採取個体を良く見ると、ノハナショウブには珍しい白糸覆輪の米国品種イマキュリート・グリッターのような花であったので、その場所の地名に因んで「鹿の子石」と命名した。

次に岩木山の南麓へと向かった。途中の水路脇に自生を発見したが、地主は留守で隣家の住民からも採取許可が下りなかったため、その場所は撮影だけとなっ

た。南麓の有名な嶽温泉まではノハナショウブが見られなかったが、そこを少し過ぎたところの道路脇に数個体を見つけた。地主の許可を得て株を分けていただいたが、その個体は山麓扇状地の水田から採取したものだという。

岩木山を後にして、青森中央部の十和田湖に向かって車を飛ばし、十和田市郊外にある「鯉艸郷花菖蒲園」を訪ねた。いつもながらの東北人の土作りから始める極めて丁寧な農法と思いやりのある接待、そしてそのような環境から生まれてくる花菖蒲の出来映えに心唸るものを感じた。若園主の中野渡裕生さんにはノハナショウブと栽培種との間の興味深い交配実生花を見せてもらった。

3日目：鯉艸郷近くにとった宿を早朝に出発し、青森県東部に向かった。目的地は八戸市南方にある種差海岸である。途中の八戸市郊外にもノハナショウブが自生していた記録があるが、現在、そのような湿地はなくなってしまったようである。種差海岸は観光地として有名だが、ノハナショウブの特異な自生地でもある。崖の上からの湧き水が海岸に流れ出していて、水際の岩盤窪地に湿地性の植物が生育している。太平洋の荒波を被る海岸直近にニッコウキスゲとノハナショウブが仲良く並んで開花している異色の様子には大変驚かされた。ノハナショウブの耐塩性の性質もさることながら、風と光と水そして他の植物との微妙なバランスが、ノハナショウブの生育に必要なものであることを改めて認識させられた。

次に六ヵ所村を目指して車を北上させた。昼近くに小川原湖の湖畔、天ケ森というところに到着し、湖畔のノハナショウブを調査していたところ地元の車に声をかけられた。どうやらこの汽水湖のシジミを無断採取しているのかと疑われたようであるが、カメラを見せると納得して立ち去って行った。続いて少し先にある前回訪れた小川原湖畔にある水田地帯を訪れた。ここの畦道にて前回、ピンクにやや近い淡色のノハナショウブを見つけた場所であったが、減反政策により水田に水を落とさなくなったようで、ノハナショウブは一輪も見つけることが出来なかった。がっかりしながらも、車を走らせ夕方近くに六ヶ所村の海岸縁にある大きな沼に到着した。ここは前回、沢山の淡色個体に出会った場所なので、白色やピンクのノハナショウブに出会える可能性の極めて高い場所である。到着後、間もなく同行の田淵先生が進行方向にピンクのノハナショウブを二輪発見した。その花は北野天使に良く似ているものの、より藤色味が強く大人の雰囲気をもっていたので、思わず「北野麗人」という名が頭に浮かんだ。この花については田淵先生が学会発表を行い今後の増殖が期待される。また、ここは花色だけではなく花形についてもある程度の変異が見られるようで、例えば花茎が極端にラセン状に捩れたものや花柱支の長さに変化があったりする。近くで熊除けの鈴を鳴らしながら農作業している人を見かけたので、自然と人間世界が交錯する微妙な所であり、いつ開発の波が押し寄せるか分からない場所なのだなと感じられた。夕闇が迫ってきたので、急ぎ宿探しの旅に切り替えた。車を走らせ程なく現代的なビジネスホテルに辿り着き、何とか頼み込んで一夜の宿を得た。どうやら原発関係者が集まるホテルらしく、英語も通じるようなので都心のホテルに宿泊したような錯覚に陥った。

4日目：午前中は下北半島東部の尻屋崎を目指した。あちこちに新しいバイパスが出来たようで、湿地の中を直線的に突っ切るような道が目に付いた。途中、荒沼の手前、防衛庁下北試験場前でカキツバタの花を見つけた。水田の水路に数株が自生していて、古え人とカキツバタとの関係を彷彿とさせるような場所であり、私にとっては極めて印象深いところであった。

尻屋崎は風向明媚な観光地となっているため、ノハナショウブの自生状態は前回と変わりなかった。相変わらず放牧されている馬はノハナショウブや同時に開花しているニッコウキスゲの花や茎葉を食べない。反って、両者は馬糞を栄養にしているようにすら見える。高台に上ると雨で水没する窪地の汀線にニッコウキスゲが、その少し上方にノハナショウブが生育するという微妙な住み分けをしていることが分る。ノハナショウブの生理学的な適地と生態学的な適地とは、果たして一致しているのであろうか。

ここで早昼を済ませ、下北半島の陸奥湾沿いを走り青森駅へ向かった。期待はしなかったものの、陸奥湾沿いにはほとんどノハナショウブを観察できなかった。青森県西部と東部ではかなり気候が違うことが実感された。西部では満開を過ぎたノハナショウブが東部では二・三分咲きである。やはりヤマセの影響が大きいようである。

最後に：冒頭に述べたように今回の旅は、四半世紀前と現在とで青森県内のノハナショウブ自生がどう変化したかを見ることであったが、西南日本よりもそのスペードがやや遅いだけで、同様に多くの自生地で絶滅が進行しているようである。ノハナショウブは山草として観賞用に採取される植物ではないが、他の湿原植物と同じく環境変化に敏感な植物である。単に自然保護と叫ぶだけではなく、人間も自然の一部であるとの生態論的な認識を若年層に教たり、循環型の社会を築く政策が必要であろう。